



門武
號 39
卷 2止



和蘭醫話 下之卷

門人 橫
池高道 言



床臺

書

卷

二

一

筋ハ軟骨となるの話

一筋とゆきの漢人も往復きて人の屈伸なる用事もあらう

筋もあらひをいづきの所と根ざへあぐ哉

筋ハ其もれ易きわふり根本肉の剥きあくび頭微徳あく

くし一筋あくべ魚もなまう肉の中ふも硬くて當牙は歯は變へま

や肉が筋と交りてもよし筋あくび肉より引くれば四度へ及ぶ

其端は硬くも柔らかなる也又一筋とく能むあく筋老年よ

よふちどりねお半より其軟うなづく肉を以て筋となす筋ハ軟骨の

あくべ筋其軟骨ハだんく剛骨のぬくから也初生の小兒ハ

軟骨かく骨體あざ成乾せぬうちハ脳蓋骨ありありと成セモ又もこう
く脳骨の大牙様かく筋たて文ア集アく筋骨とねまると同理かく大筋
老人と筋が骨の接めかくお歎が屈伸自在かく筋の腰つらまて伸じ
かく蘭書中老の人塑像のごくかくまほのまほのまほのまほのまほのま
外人かくづく飲食料をほのくちへ入きく養ふのをなうへとあくこれ
ハ葉去のまかく守ほ人の活潑みもあれと曰だの事教言まほひも生
もテ様よかくハいく事うと一笑歎へ

樺林九臯又々一語

一 来舶乃蘭人僉く三摩學者識者之樺林九臯又々一語

かくづく

不傷も初年ハ唯く船之事を妄考す不治く後より合意事くせんよ以
和蒙地奉ハ今く俗說夥事を是モ乃を不傷が妄考と信へり一个
然む論よどもて是事由ゆ人をあくびきなれむたゞよ一語りへ
清港の喝蘭譯士樺林十兵衛名通字達又不傷が旧通家の祖ア先年
公金ひく船來ヘ下向ヘ已來冬物ゆの財貨速々備蓄りヘシ不傷も浪
速よ寓居を事なきがその通商へ數往く歸と文うら無く譚ト久郎
偽号イと舶來の蘭號を彼土の音典とことぐれ讀敷も多し人ありや
う九臯名アハくとひそむがん先吾地東都ハ措ミテ其佗諸國ヨリ
立せまゐる阿波陀流の醫と称と須アリヨ素事とせぬかと峰澤ナト
再猶傷とくわざそれゆゑあひ名ア於る業称ア羅甸稱も文ア一軌

らあ事へたゞハ馬士が源氏の爲め成文えまづがごとく雅俗
混亂乃称呼すやう其譯士とりまゝも言語ハ蒙よ通せし事
なへて榮ある愈く徳を修得する所を勘へあれ故頗り山海も伊勢
諸島とも言ひハ因み本の言語通せば此より事無く國ちとよと解
る事ハ甚る難きと同じ事ニ蒙人もこれよなす／＼文盲なる
もありと年せよ英雄人を數くの徳多くて其口吻の
まとめて蒙語をもて奇貨／＼二三の蒙語を以て俗人其體を以て
能事もを解る人かくとくを思ひざるの甚／＼とたゞと一曰義
才林幸宗吉名直政字を提携して蒙書あはばもとて徳を試ふるもべ
いといひよ頃よりの子徐市郎植林の舊表

をもす伯敏^{モリム}られをとく左も標^{ヒゲ}張皮^{ハラシ}をひき一寓^{イハク}同^{ドウ}く不^ハ傷^{スル}被^{スル}
夷^ハもあれ義^{ヨシ}足^{アシ}がち^{アシ}也^ハのあたう「ロイケルシーキ」と名^ハくもめ^ハる^モ遠^{タカシ}
征備^{シテ}用^フ方^ハづ^ハと^ハされよ^ハ一二^{イチニ}張^{カウ}を翻^{ハシメ}してあき^{ハシメ}を讀^{ハシメ}む事^{ハシメ}流^{ハシメ}の
あく^ハ其^ハ解^{ハシメ}譯^{ハシメ}と^ハ事^{ハシメ}捨^{ハシメ}り宿^{ハシメ}看^{ハシメ}の^{ハシメ}や^{ハシメ}九^{クモ}臯^{ハシメ}又^{ハシメ}子^{ハシメ}相^{ハシメ}互^{ハシメ}よ^{ハシメ}牽^{ハシメ}し^{ハシメ}て
以^{ハシメ}も^{ハシメ}吾^{ハシメ}曹^{ハシメ}此^{ハシメ}み^{ハシメ}衣^{ハシメ}食^{ハシメ}と^{ハシメ}も^{ハシメ}かく^{ハシメ}の^{ハシメ}が^{ハシメ}捷^{ハシメ}敏^{ハシメ}り^{ハシメ}ふ^{ハシメ}驕^{ハシメ}か^{ハシメ}愧^{ハシメ}角^{ハシメ}
く^{ハシメ}と^{ハシメ}称^{ハシメ}く^{ハシメ}や^{ハシメ}まだ^{ハシメ}是^{ハシメ}不^{ハシメ}偽^{ハシメ}傍^{ハシメ}み^{ハシメ}詫^{ハシメ}く^{ハシメ}同^{ハシメ}學^{ハシメ}と^{ハシメ}爲^{ハシメ}也^{ハシメ}九^{クモ}臯^{ハシメ}多^{ハシメ}虚^{ハシメ}譽^{ハシメ}
せ^{ハシメ}れあ^{ハシメ}す^{ハシメ}後^{ハシメ}此^{ハシメ}圖^{ハシメ}書^{ハシメ}を^{ハシメ}又^{ハシメ}人^{ハシメ}高^{ハシメ}藤^{ハシメ}方^{ハシメ}策^{ハシメ}名^{ハシメ}淳^{ハシメ}字^{ハシメ}堯^{ハシメ}又^{ハシメ}が^{ハシメ}譯^{ハシメ}も^{ハシメ}る^{ハシメ}不^{ハシメ}偽^{ハシメ}
も^{ハシメ}其^{ハシメ}枝^{ハシメ}よ^{ハシメ}鷺^{ハシメ}鳥^{ハシメ}不^{ハシメ}日^{ハシメ}よ^{ハシメ}せ^{ハシメ}よ^{ハシメ}行^{ハシメ}く^{ハシメ}九^{クモ}臯^{ハシメ}其^{ハシメ}藏^{ハシメ}書^{ハシメ}の^{ハシメ}名^{ハシメ}一^{ハシメ}示^{ハシメ}テ^{ハシメ}蘭^{ハシメ}書^{ハシメ}
が^{ハシメ}より^{ハシメ}優^{ハシメ}好^{ハシメ}且^{ハシメ}免^{ハシメ}園^{ハシメ}の^{ハシメ}冊^{ハシメ}も^{ハシメ}あ^{ハシメ}事^{ハシメ}ね^{ハシメ}蘭^{ハシメ}の^{ハシメ}治^{ハシメ}癒^{ハシメ}の^{ハシメ}彼^{ハシメ}う^{ハシメ}ま^{ハシメ}氣^{ハシメ}も^{ハシメ}じ^{ハシメ}種^{ハシメ}
傳^{ハシメ}く^{ハシメ}もの^{ハシメ}と^{ハシメ}不^{ハシメ}偽^{ハシメ}和^{ハシメ}蘭^{ハシメ}簡^{ハシメ}方^{ハシメ}書^{ハシメ}と^{ハシメ}著^{ハシメ}玉^{ハシメ}中^{ハシメ}に^{ハシメ}它^{ハシメ}見^{ハシメ}一^{ハシメ}後^{ハシメ}ア^{ハシメ}ト^{ハシメ}些^{ハシメ}

信又ハ昨和蘭まつてを呑ひとて之等ハ洩トヤ

諸器物の話

一 和蘭の人制多ニ有アリ乃フ

西洋制造の器天文戦陣の用ハ姑措く醫事又使用して甚勝す宜シト也
教言又以前ヨモ「カティテル」の素械又此銀器も送る小便閥或ハ石
淋あらヒを施トナガヌレ墜ち墓をうちテモキテトシ小便閥も又石
治愈えず遂又其役モニムキドム用カニ効トガル。外科もどきにて
ノムトヒナホウ黒ナラス而モヒツモトモヒツの氣のゆるむものニ
テホウの黒基ムツヘヘ懶ナラム人ナド功ヌト称モヤモト有ア居候ニ
ミテ同志はれ浴基蘭又造多シおも教言ニ見ナシ人大矢尚齊ナミヤマサシキ名九
字執

中尚齊ナミヤマサシキ蘭学ハ更ナラ産科ハ専門ナレバハド醫癒の基ニモ究理トテ
其号蘭學ハ更ナラ産科ハ専門ナレバハド醫癒の基ニモ究理トテ
創意トニ事ナラニ臻る開拓の財乃國之種氣を吹ヒテ再び吹ヒ氣の度
ラニ墨血ナラニ膿を吹ヒテ口の中へ膿汁の入ラニ墨色ニ基アル精液
を抹ニ類若干種人の力も費シテ小造化を成シハ器製ハアリ得
蘭人皆モアリ巧ナリモ追ヒ究理セヒ接ヒ墨色百出ナシト文
明の仁有難ミ事ニアリシモ無ニ送ヒ工色之事ヒ者モナシ人ニ
呼ナシモ言ハ鄙ニニ舜瘡機山衡を制トアリトモ工色ハ觀音也名ト
造ニモ堅車ハ研精トニムニシテ御ニモトムの事基事ニ通
露灌ハ向方みも焼紫ニテ賣處アリト人ノアリモナモ他西洋ハ硝子ニ
シートル止ムニテ基ニトニテ人基事ニ人ノアリモナモ他西洋ハ硝子ニ

守あまきも害易よもあくわがと争ハ徳方み素すあくみすすぐく硝子
墨竹の素りあを騒ぐり勢すよもんあくをあおきとあと破き易き
よゑる蘭人將軍のあへうれのほよてねを製ても破くとひま事無
し石脛の邊へあくねやうとひゆれを追く考つ車となひ叶葉のれう
まを枝を枝く其素はくあくとひと薄荷精さざくもけの硝子を壺へ入り
く氣をつむきハ忽破くわくあくとひく素セ一壺ハ又く破きざれを
それと又かく硝子やうといもくとひ事せ

やくすへ
葉山の詰

一あらびうきひぬ因く葉をひくと敷く寝やは事まじひま事
まのちう弱ゆくさんやともなひ

萬葉の事西洋人甚だ其事人ものいそく
被りぬかへはく写あらず其力十倍も
彼またあらあくも甚ふくハリく毫理つゝひ事とおもえひ蘭疎
などほんをモニ使ひて西洋人を此壇をとくに用ひてがましく作
蘭疎よかゞさず万わ國有の壇氣あくもうよひぐくも壇をとく
くぬよひあらせふ壇よ抹くてきくがまく下蘭疎五冬散
の病脉具つきの病へを治マシキヒ御素う五冬モ湯法うそく也効力と
なひす付蘭疎の多量何より伍用あくや傷寒論中つ多量の通う伍用あ
るう蘭疎質軽ろくかともやうめなきは一貼の練面ムラセヨアノ内
後てヨリせ間一ヒト加ヘヤ練のとあるべしとされヨハムカクヒ古量

の通すありせども病家の体面にあらずよりも病家の体面あり
肩をさせざる事よりへども彼は業よ終ひとゆくを其制を盡す
先の時傍よ敷きし處を用ひてど平治するを以て効も奏され
其外「セーロツフ」より敷きし所を以て「セーロツフ」傍人より字を填
舍利別と書を局方發揮るものにて此敷の事を益
人參膏などゆく其業お漬けめうれどりふけらるをあハ今えボウトウ
祐額より是も「ズートホート」スボウトウと文家より傳
「シヌカ長傳」と傳称しれどなみ甘草草敷より甘艸の蘭称を生す
名より「シヌカ」と號すが矣而も之と云ふ名よりハ無くアリヤセ
あく免角言語傳づハ矣而も之と云ふ名より吉利あく敷一効

鶴多さお次山あらまく御浦又櫛又茶桔を株根を取て取るのれ追年
鷹の枝をもじりて用ひて其氣音と麻子可を也とくもあし
掲く氣を以て人海々氣附の薬利を爲せ寒湯もく創力をもつてああ
一葉湯のゆとくにけ素精をと徳く自湯口加て服されば不
至強不ひ乃易くあく氣を車あくをほんのいふと云ひ及
むもむかひ勤めまく毫理深たうとりの度へ又阿房山西洋「ヲヒヨシ」
唐山音を填め阿芙蓉を思ひて阿房山とぞも零の酒ある
「川魚人」と唱えや以聞出栗殼を用ひて燐石の行を用ひて巴僅小の阿
ゆく効能をもどりてこれを年八箇書中あく氣附を之も「五古雷もと
品のわを奉り車下のみの通す右素敷一二を養ふてアシテハと

和諧醫書詩卷下

卷之三

卷之三

やくひんひ
燐蟲彼此有無乃活 附五方差ひあらの活

一
熱病を治すが西洋の「コルツ」皮を穿いたのであると承以此れ
吾士の水車も珍稀な物と感ずたけ代りに健ひお

「ヨーロッパ」の事 西洋甚しき
文明の化行在とかくひびくわが國
くわざわあともうとくも土も産
文運

「彼土又用なるとも多々有るがの事うとなれ此よ「コレツ度」のせ
をもと爲ふも愚公が山を移す事は内裏の事且病論瘻法のあと
を先駆く事あらば抑またと云ふ事あるべく先駆の事うる
く逐く此よ先駆ふるも元理と云ふを先駆とつてまくは傳の事
うるハウトテラバモ法ハフを主とドハ奴刻ムル事と云ふ而ハ瘻
法ニ止シマシテヨリ某君の事を大と称し今また治法の事を大摘と
云ふ事す摘わらべと忍ソキニ事あきくシテ瘻たゞあきべとあくの
事あくム法ハフ部ニ傷モトハジムテ右学文首の嘴と云ふ事と云ふ
字の折枝家より考スルトテマシテ一張一弛文武の事となる
畠中燥屎を辨するの話

一 傷寒論より畠中燥屎云々此よあるを蘭科家等より屎を勝中小こそあ
き畠中燥屎といひどりの人ありいつまゝ隨従とべと申
前よも御く申じて傷寒病ハ仔細ありと嘔及せずも口せてもケ核の
事自らの其感ふりびとあへて便所の人のもとから折く世等の
トお
結果よ體へは傷寒病其を見対ひのまゝ書かせらるを本集家より
肝の裏にすわらへ腎水つるをかどり言と曰くと同く脚を屈すすめ
畠中とよハ胃腸も同く飲食の足跡りとてと細とのこと
あり行ひながら胃を挙がりゆゑ一種の疏縫のものとぞえんと疎
とりと金一畠中とかくと腸中とかくとも廣くお腹あるべく因味糞
結病もありは畠中より屎をとつてすは傷寒論の化ハラク縫

猶を祀り於處燒化を頼みとあす山簡は後論の事也
外より股部を回らし俸郎の腰の燥潤を乞おうとお考へきの事也
山簡書中より便鴻之事を此が解て腹泄と譯る腹下といふと
も俗人常以爲之始む事より之をかゝるも不審と思ひて能通ト丈
えく乃ど股の通じゆも穏なれば大便の如きハ
御坐りやまえりてはるの後同せり人を従ひ細んざりゆも
計りやまえりてはるの後同せり人を従ひ細んざりゆも
後理をれ辨くことを看るにあつて毛角清先生挾寒昇殿乃がど以此
客はれも居て傷寒論の城に入らぬ蘭科者流の妙忌と申す
景氏なりも微力無能あらんの事そしやも事ありまくあらぐは蘭科も仲

ナヘアリ
景流も李朱家も取舍と其人不あらず也く
鍼灸穴處の話

一 むうとう針灸完處の名あくと其針灸をつ書某の完と何
物何處の理ある某へ針灸もれ某の施灸へ無ト某の疾病を治も
ねど確く説定ノエヌ以剛剥乃は某の完巡某乃縁一忽も其驗す
るもの也す
此事心の従の活潑血の活の部畧門なるとも再委ノアトシ鍼つ車齧
人毛毫針を用るを易取以披針もく得血ノアトシ事ハ往々多ニヒニルモ
合々曲池もく其處を分すノアトシ刺にて取むべ唯血脉絡り能く會せ
ルを刺も事無ひ余の事彼土ノモ「モグサイブラド」トシテゆゑひ漢人へづ
ル

法瘧病より久々不癪は肺熱もとあくもあぐれ冬一月
中ほさ此方ハナヨ行ノキヤアトモの胞中 け方近セ大基行ハシニ
月二日冬ニシテ一統あく並病の人も養生冬ニシテ一日拘火ソヘ來於醫
官河村元東氏う若せる桑韓酸西問答ト朝鮮今冬活せる事に彼留貞
揚州趙崇示壽上げゆを多活セテヨリ又之韓客呵ミ大矣トモ故也三の
人を多く公其其背を灼くあきよ當る事の寧苦一モガムンや是
物を肩上と人まの胸せしと被て冬痕十月又遍く一完膚またあり
物の活ヌカナリキキナキシテ僕射州ト東北よりシテ之の略ニ而
心頭ニキを怪ニシテ今此言をすく累々貴國養生第一の法ナリ
奉をもす其虚實を問ひ可否を審みせば人をアキバ必久ヒ臘

體積も事常經のじくと人をもくと見をもく裏咽も勝えざりしもら
く巴足下から俗の深屈を為事なく妄聽の得と岐祐せざり當是
下う一身上のこなもん貴國の生靈遍く其賜を受もよどりヒ一車
馬の河合君の如慶墨セキシヤモアハ此韓人の後も固ナリ
陽氣もくならん重賦なバ財と擇がくと冬ト一月又も限
度ノず重賦陽氣微ニモトシく病久もひかく傷寒論
就寝を察シニ二字温少と後の眼圓もト其賜人本論ハよする事のよ
合とえせうといふ也一西洋ハソトモアハ既往土 五日國もどハ冬ニ試
論シテ若きとぞ官房又拘ノムモ既知之完筋と指がハ既トモ世も間
ニテマホアムタハ腰のたびニ冬セドモリモト記洋もく蹠跳ニセ

よもと名を指すと云ふ人中水溝など名を示すと云ふ鼻の筋とりよ
か簡易と云ふ易い病家う某の元と名をとるゝと云ふもそ
筋をもつても極きよ似てく宛名あらがむも鳴呼二十部位といふあ
甚頗べ考究一一部位を教名と號する事一圓圖又名を繰る時傷筋せきく
二而上あるがむが子と云ふ書き下を云ふ名を考むも云ふとおもひ合へ
御剥皮觀肉の際漢人宣傳より名字せしる其肉筋を遠まく某の筋
筋の筋をとひハ絶くはらひ徒筋をなどるのと並ぶくは杜撰多
る也一後考を俟り其衣字を釋せる事あらんとなりても御
考今又とあらどより部ハ天をりく名づけり於ハ地をりく名法多
姓陰陽又較察けるハ大意と云きとも細りと釋り難く古人誰の
名だけ初一やうべく傳くるあらま宣傳をもとと書本也

あらんよりとあらじよろと實よかまひよるたれ、考るゆき世名の教を
尋られ寢すひ湯井先生の完名偽政あきよあらんと寓圓せしにそ
も計名偽考あり名の考るまへたくひキ姫子の隨輪通考もこへ
釋名たゞひキ石傍が眼中うくよ寄るもたくの書ふあらんとた
かり名一もかへ世信と云れまく西山葉科者流よ宣傳と付論せ
しよ惟神經の根と茎とをも筋と云ふ矣をもがどりと補定いと云
筋の筋の筋より神經左右とも事わきば其筋を摸して考るも
見るべくあり今世間事通じて五の筋七九の筋など脊骨筋と云ふ
く多とも也殊もすせり算ある筋月八椎筋月十椎よりよまうの
筋まづかとあらまを椎骨八軸の筋よりもく度下うへよど

ゆくをもよおわる
冬の朝者流りに枝骨と画脚と見られ
せん、冗處を窺ひ人索めりと誇りあはれ
を駕あとのふゑどれもうかねと野曠の稚骨にて彼普通の指
くすむる袖あはれかくひきゆゑどりの
たゞめとゆうてあるべくもとれバ射を射るの事よく皮よく捨
りあはよあつてとぞ擄獲の肩人肩よ筋方舞でし枝骨をもぐれ
ひ蓋面腮四肢よ手よ手よ集えて土中よ埋もま五箇月を掘
出しお能あひ度て奥手を防せぐよ芳草をもち力花えて攻究
乃奥よ傳ふべ

少康說教贊學欲乃詰

一 和蘭治病の事 痘あざの洋人著作の醫書いじゆも古來有病
乃治瘻あてうも多矣相傳あひまつされありて今又西洋科を支えひく贊
えよはすへ翅わのみの類たぐいよ箱はこちよ巣すず
鳥爲丸むらま不候まつまも向むかそも足下あしのめくあく西洋科ハ膚はだとなせ
どあやうが角つのびありよ下した向むかよも配あわせふる芻こ芻こ葉はの言こともととづの
聖賢せいけんの教きょうよかづきく附老流つきおりゅうも文ふみづく二三を聞き聞きひま
諸人のいふるす多々たゞ事一ハ肉にく事ことてゐる事洋人の憶想おくぞうの復かと大相
違たがあく治はら瘻あざ不ふ補助ほじょとわらも半はんあくこゝもくれ行服ぎやくふくひ重おもく索
従じゆ行こう事ことする事ことヨリ此こども西洋内景せいようないけいの事篇へん捷徑けつきの一事いつを乃のとす
友とも色いろ角かく角かくと論べんえまは之のある事ことあくまく美觀びくわんと見みしやうす

かう一あまくとええよたまよた古ハ四方の天官星斗を窟キテ
民ニ農事と極へとめ遡後又曆筭行ひまて一微小度も差ハビ功あらず
りふゑ一あまくとええよたまよた古ハ四方の天官星斗を窟キテ
民ニ農事と極へとめ遡後又曆筭行ひまて一微小度も差ハビ功あらず
りふゑ一あまくとええよたまよた古ハ四方の天官星斗を窟キテ
民ニ農事と極へとめ遡後又曆筭行ひまて一微小度も差ハビ功あらず
を待とく一回瞭然星度を推す一推測乃思也あく算法
客或ニ昴鬼廉岱又小數星もど等盡さる巧ミナリとリテ世や
黒を用く觀ると大捷經ナリと内景つ葉後もあまされどア
漢人の脾を強くされば生尅水と肝腎を克一肝木と補ヘモ心火と妄
んとまざり五辻迂回の旨説も拘々と日と費とすとも腑腑ニ係
ノ房乃血道支絡を現見とす捷妙とありされう推く其手筋ニ
ノムある某の終ニ繫結あるとちもと容易の秘古也南華ハ桔槔

を機心あらと諦るも不協を附多シ捷經あらば能こと勞みド文教も
ヒ自鳴鐘の象徴もも出よも世もこはれぞハそれふてと向て此器舶來
せしも其用を成と車晝夜重宝よりて使用もしくたゞ其本素又
もせよ外臺製のみせよ我用よりて是とをもひとあひと申外用の法を
奥から用くみそもかくおこなと疑りす箇法一條のことを教員あらず
思ハきくとあ傳すは能く思惟あくべくひ不協初年未練の派を懲悔以
キテハセ東鄰の大あ望ニ英氏乃は簡亮玄稿甚好書く歐西ヨリ志と人
を釋クリと乃くものをうちとめにあらゆ解説の一車岱迂遠がううせ
申されば不協よりアラモトモ近よりとれ一房又ト近く近く近く
ナカニカニ近く近く近く近く近く近く近く近く近く近く

人をもと内なるの事も後せむ竟うて承ムルあると云ひ物あふな
作りへばよしと云ふと申す事やうと曰ひあひせり

解體諸書目之話

一 あが國ふゝも解体の書目あゝと刻り出し西洋の後ととかか
凌もあるねえなしあもるといつゝと作や
行と鳥遊と解説と著者もせらんあつ不傷あと渴せまゝの
くそ論と云可否と論ども事を乃せだらまと居く年あ
清少清助氏もとれ 和菴肉集の事あつ不傷世生又獨セ
節詒掛とあそびふあきと崎港の某賣とあく其可否をとさ
福とも校して刻よせと托さん任せ一から行はざる事もあり

西と生半身半生寛裕の生半身半生も言をかゞるそひと數多
くの草創の時とくにまご苦難逆行りきどもあつ車又ハ惟慈生
乃眼を是とせて究理とどと端を蒙されあとあく近年平安袖木太
淳号雀石庵う姻家清公績を奉て浪速不傷う寓とあく宿とく其
解剥せー一事跡とを詒論へゆく後解体瑣言を著刻貽する書
中不傷が寓てあり話せ一事もあつ専門眼科を學んで其業あハ尙ア
其書は不傷と號を譚せると詔吾せし事もあると友人中川允吾名誼
方竹山先生の門人也醫事ハを頗りて批评をもあつて他日一詮入る
べく伯方氏年而生よひちとが批評ノ志源く不傷と常に從事して付
論を傳ぐんと一大筆を成とて蘭科の事ハ橋伯敏矢尚齋齊方巢父を

毎よ篠窓と石傷と亡年の文がる○のう解説乃書を蘭ち中よろしく
その風をなす事とて思召以洋人若化の圖繪せまきの久しく眼中に
入く三焦と名あらんやく承るゝとめゆゑとへ素め感ひるふと大息す
ベキ友人橘南谿傷寒外傳奥事と其圖画を看御師又征ひて訊問ある
也一歎かあく研究あくも宣ひ其形容を遠ひあるとも情欲飲食生氣
あくも因ド用をや千の具あらと凡例を申すあくと殼ち又人屍を観
ざる所憾と曰ふるを致ひ不傷導で湯天下の人よ一言りつて安且解説
皆一車西洋書を傳論一歎を刪剥して飽まくも其理を窮めず了近事
蘭ち譯めくらうとく甲も解説を解しも報附を後く令傳せうとり
べく哀早ひま人死を屠殺と車ハ欲せぬも宜一からべとぞなほ段百事

用とせんとまゝは歎教みま事をさくや此事石傷 天地よりて
ひくとえひ董吻児曹人屍を觀る人ふ劫され獸走るのを从
ハ用を諒する事の極思ひりくと嘯めく止すが不傷も嚮附サ奉
み苦一之やひあ自少仕て觀りしる餘人の觀るを止もうと猪一力と
3.べくとも左様あまハ至く並寛公正を以告すをよそひ是下連云
而並交を以く汝すあくぐい

華佗訓心絃詰

一渾の東華元化あらん腸を洗ひ心機を換へ一疎じり傳へひある
人の手ひと世華佗が御西洋傳ひまつまつとひふを傳うがれ
矣

ほのまへ今よりよひ百年があふく阿蘭う國も千七八百年のあま
きを華佗の術被土へ傳ひて附會せしものよき事はんりも
べくす佗が技の華嚴安常が以て史の事とぞきのと是夏夷堅叔
をえどんにとなく腸を洗ふ事からいからばひ衰あよもト通ギリ
ステルハ浣腸法耳肛門より薬を射こみて腸の中を浣ふ事より俗
人附腸の字を臍腑の者執つて瘡樹と思ひて事より准之室の通了瘡
と云ひあく浣腸とぞ體外の腸を浣ふ事あるはず
換心の事ハ不傷骨などい是ハ心猿の結紮の節入り通貫識ハ心猿
の大富徳はあくねばたとく換へ乃とも他人の妻又熟年する傍をい
ひ出まじあきハ唯華佗の術を祚りせんとく史家の筆云妻せしもくべ

「必死のゆとハ多恩をまくひそれよりハケイベルレーキス子」と
やうの後もくられハ姫媛陰月ふくらむも産のまつても産生を
お術もおよそ後を経ぬくあけと毛取延とくのとたう其附母脛を截て
う尻を出一を痕を縫あはせく母を助け死せざるもとのはゆく
然ちよ西洋むり一へ術今すとく其母を救ひて児の生死と向へ
さう一よ近きもろと母も児も兩あづれぬれぬく庸工かうと愧
ひゆ其術之利力をもつて母の腹脛を截て兩もよつけそれより裏ああ
るる官を截て世財を害皮肉か邪淫みからぬ括よ又脛もよ某の處と
某又在よと熟慮して截て児を洗出し其創痕をあひく某を傳け又母脛
乃のみを縫ひて倉に身蓋を結く事もて毛術せむ若密敏捷なまされ

死へ、うれ御わざりゆく母四トモみ生はせはしゆく良ひと稱
とく。まゆ御つよし武も人もなれか。肚腹を截ちくされを聽
事も厭易い事あり。よきと截も脇児よ碍らる。其神蹟を間どふあ
うなれども、精察せば腹皮よ脇皮よ。あづらも。の腹皮肉あ
や二三龍衣の脇皮せば。御れど事もあ。角も。毛も。筋也。巴
跡死を。追ひて命すれよ。死せんよ。治よ。もんねよ。あ
じき。御。宮許せく。振りよ。行き。あす。腰。御。ひく。もんけ
くハ後世。御。事もあ。其時も。押。まく。人もなれよ。あ
ぬ皮肉のうち。ある。神経血絡とも。其端と端と。合ふ。金と。合ふ。又
せもそれ。附着。あ。意。又。合ひ。血も。神経溝も。通す。也

たゞこれ神經をともあれ絡の端に處りあつてもあくまでも醫金創を
ぬひ又ち瘡口きずに膏ハグマを傳けしもあくべて佗タガが術神奇よしんじともう
みほくらう其中藏經そつうぞうきょうを門人もんじ吳善ウツネがもよなもよなとりと傳つたひきども
是鄉タヒをもよす書中換心かわんじん洗腸せんこうの事ことも見えた佗タガが術今よ傳つたひを歎たん
もよ人もよひと多多くの傷きずも此こを歎息さんきつ致いたへり而今幸さいに西洋せいぜい此等このだの事こと成准なま致いたく
考かんひつら思おもひきやひ万まん一いつ佗タガが遺い書しょ歴史れきしによひもよばは淺あさめ乃の人ひと
ハ猶よ々まだ皆みな信しんひべ其その用ようは適ふさぐ何なんぞ蠻夷あんいの術じゆをとく鄙ひむ者もの
と真龍まりゆうとあひて遡迹そくせきの輦國じんこくのあく數葉すうよう公こうあくとよも呵かく

ア仙薬の詰

一阿仙某トシテ此土ニモハシタニシ用ヒテ其能ヲアリ東壁ニ

あばれ
百葉煎 論說せり いふかまおほくひ故に政も尋ねてゆくも

耐セムめく紫シモクめのトレス及ヒ 我國コトガタニカコウ木カコウとシナ木シナの兩種ツウシキ
あす以アリあり、又名アマニ爲甚鑿金ミツキ。後アフタまことにほんを五倍ゴベイより多く紫シモクを事ハシメ
りし 吾國コトガタニ泉州クシ泉州府クシブフより、見ミを紫シモクを多タラめアリ。舶來ハルコの物モノを大オホき勞生ラウジン。
古製コセイを失ミテひしとてゆ
五捕子ゴボウをもくとも奉人ボウジンのものモノ事ハシメ。五倍子ゴボウと蚊子木カコウ實シタと甚シテ肩カミ
あよアヨいきアヨイキや地ジ實シタりく紫シモクもあアリ。す蚊子木カコウハゆアリ。樹ツツゆく俗ハタチ
み瓢ヒラマツの木キよりあみアミ。泉州クシの方言ハグゼン火除ハゲン。火除ハゲン之ノ極ハシマリ列ハタケ其ヒ實シタ中ハタハタよ
あく墻代カツダろとト火焚ハカルと陽ハヤシく板ハタかく
里蚊リムシ乃子ノハコ也ハ。中古歐羅巴人ヨーロッパ舶來ハルコせス。口授カク乃時此實城シタシタ城シタ指シテ。蚊子木カコウとひひヒヒと譯ハタハタ。授ハタハタけ。又蚊カバハ蚊カバ也ハ。子ハコハ子ハコ也ハ。傳ハタハタ。
日本ニホン称ハタハタカコウ也ハ。思ハタハタひ再得轉ハタハタ化ハタハタ。名ハタハタあや憲ハタハタ復ハタハタ。一言ハタハタ費ハタハタ一筆ハタハタあらうべ

半夏厚朴湯乃話

一金匱婦人咽中癰癧云々乃記半夏厚朴湯在當玉之法也
所以ハム何モ婦女ニシテ限らむや男人リム此証又用う庵一ノ法
カムニキ半夏ニ婦人のニ寒を置セシトハモコロケのミ草となヒ水考
矣々哉

足傷もハニシテ此代也かと申説ハアドハ事々ハシテ勿論也アムト作
事ニシテそれと対比ヤガモハシテノモ後攻乃端ヨモト語シテアリ人
喉喉亦ニ骨山也一たるまつを結喉ニ名づけハ男人ノモア向く婦女且
ト喉結喉アムシテ勘シテアリ又解説研究の際婦女ニシテ骨裏圓一骨
ちも喉も空ニシテ肥人ノモ此骨勘ナシテ空ニシテ骨裏瘦人ノモ結喉亦
ラリ空ニシテ空ニシテ骨アムハムアヅル肉ヤセムニシテ膈噎の証れ
ハムトモハムニシテこれも診症外側ウツラムベキアキハ骨の山山也モトスハ
其部ノ肉ヲ枯瘦シテトモ以テの事よく

漢國の人醫才云々此話
一文字ニ富ム漢人ノ故ニ西洋の説を信セシム也
漢人文ニ富ムニシテ是モアシニシテモアシニシテ其舊守株ノ外を顧ミ
カムアシニト國境アムニ言を發セシム也筋傷が故人東府の大保

正益田睢軒長崎へトモ一時其地ノ清水挽葦を以て其の瀘州乃人横田
せうの生財述セテ傷寒ニシテ得ヒシテ書及清人杭州宋大庸が批點小註
跋あは是汪竹里なる清客と今成基と呼里が跋も此を上本も
了事を益田よりと石庵が寓持ヒテ吾子が校正を以て之より
此宋氏が改悟才國醫書を著シテ素靈と改テ又戴ヒシテ於之を大書
令より禁じて刊を免されをもく久習と云ヒ以事を以て今滿の東
又かく乃ハシテこれと同意の人あると云被あふの趣あはれ其門人
田中良仙再不傷と從ヒテ校正亦ヒシテ且不傷が一派を流スル不日
萩府医官又利せぢせぬ也アトおうがく素雅の趣ヒ微ヒの趣あはれ其門人
又利せぢせぬ也アトおうがく素雅の趣ヒ微ヒの趣あはれ其門人
皆國を喜バタヒ先覺未發の確論也アトも國摶又擁撃せられ行

ハ多く事あへ一例を周習ナリトモ 皇國の今此禁ならんゆゑ万古
もまきさる事からぬ事と云ふ者有ナム 國恩と云ふべしと
因 此土の人ハ才高ミテ文富所肩くせん度を以て雄英の人輩出才能
中今 昇平の附トシテ德色もよ興起を蘭科の事も 禁無クシバ研
精もくみ到るを難き事又あへども此時又生れあハセキをくとすと
徳アヒ脱るを難き事又あへども此時又生れあハセキをくとすと
論博く看傍蘭科の事も幼めりアヒトアヒあれども傍あ煙の酒をきく
かく弗郎察壺の酒ナシバ肯きくとすと内ち乃ムハ燭乃大半を失ひ
タモシテ私語
サ攻ムニ得一例を彼士の治療法いテスルナ接冒枕スヒハ

袋の内へ糞尿を入り胸腹へ當る者多く通飲を治し胃減健よとす
姑法ハまた燒く傳けあくびを帝と互換して治し肉瘤の病よ徹し
とくかく瘻も此法とま革かれども蘭人の紫葉ハ勢鋭く速速ノリ
瘻瘻法もあき又同じ哉泡法と瘻人もあ此土みも丸薬をす口又ハ
邊へ傳祐をもかくの方あき又蘭人乃法を猶猶とはくめ哉よと
種々乃哉泡法あくまほ一う奏効ある方とも多くんとあくべ
治ちる方なれども内科の用のみあくす内科も多くんとあくべ
らきる事ともみん鍼法水治薰熨法麻木法の如金く書上の空言と
あはくは名ありかくす事後法ありて愈々病むの道理を考へら
ああく事よりハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハ
ハハハハハハハ
ハハハハハ
ハハハ
ハハ
ハ
ハ

ニ蘭ふメコアカンとヨウリコ_{〔蘭アカリコス〕}一名トウボシ罷臍の三種をの用カク治を
究竟三品とも腸を快通とすのあざもなれぢの病も治をとすにあ
べくむくい斐の德本翁が从ひてると兒曹も常よりみづきく腰
ハめけ通すゆかう其中へだまとも確津歩あく乃も病を発を放り以
はあても腸とく通すゆの茶湯を用ひて並べてとせう一概の論の様
なれとも世取古醫の流ひ教とくべつ商人と肉食のことをなれど腸
病者多きゆんうそれ又平食なれど此の入とて迷ふ者どう 皇國
政治方あたゞこあら民間は作り一めすと古方まかんう漢醫はぬ
きの人ハこれを草茎間の薬としてもと嚮きかへ水火木金土の五
つとも用力する治病の奥とく年造にゆかたとむるへく看過

中を仕事天地間あことくへく醫治の用あり研究せば偏傍
蠅を渠ふが搔ふびごとくにあゆみから人軀間より痛みハ極
き痒みを搔きぬきを擣ち脹りを摩り冷氣を息しゆき温氣を
吸ひて汗接して深く鍼く穴を開くとあるひを擣りて吐しある
を唾を傳あふひを氣を充ちて疫を避車喝して回を解し五禽を修し八
錦を行ふ其のれもみ至りて嘔血を還え水あり創傷又糞を塗るを
う基一ともあづりきとされと 皇國の人情を戒へたまふ
そ思ふ哉

仲景氏又拘泥と呼乃説

漢人の後内景よりも甚乱離を離れて承知はる其所漢人中も

長沙氏一人を主徳しての持身中いにきハ彼先入とたりてあ
こよ拘泥固執一とすと是へ

されども石傷寒社の人と號をりみもまじてもく傷寒論が文了作
ゆゑす中すと石傷を強めどもあこそひ足りるを癖とあもひく
か示す亦あい焉るにて公卿や友人等一と向徳やみ長沙氏と称する
る車一と隠居すのあきハ行も喫事よ聞こへぬ車うちりあひ
も及ばざる周旋もくらむを一と称をす然むとも又一條の車長沙
と隠人仲景氏を長沙氏へとすと是其声よ大の徳名長沙
と称す又南陽と稱す車もあるあきハ仲景氏の生跡の地なれば
あひゆすもあん唯その孫耳標の傳傳でものの寄よなりやされが

かく称へば其は漢史其の事歴史家傳の教訓がるものも少いの字とな
え其任の年月も秀友詔へまことに改めしと舉るも於て其時日其書ど
もに於て一後あつて皆時の守も仲景氏ちゆの守と併せられし守と垂
きみたうと此方の武憲たゞ其の府城ある府役々をと示る有
りくそれ又愧きと其任を車ひく又恐れむと車ひく事ひく
事ひくと士紳保昌が丹後あとぬくことそれくの文承又恐れうふ生る
事ひくいつうにうう仲景もゆの守とゆかうゆとゆかへととく始
て見得すとゆくとなく傷寒論も仲景氏の化とひしハリモドモ
崇じく作者み比せ事をひぬ事もくわから根うたれた車をひく事
又とくと自己より考すく矣なうと私を思ひくハ洋人の肉氣の説又

も眩せり事あくふみ一條の事路よりもかくはあれもくらぬ傷寒
論乃一書後人挿入の事ハ其眼の人ハよむ才よもとくわあくとなれ
ぢりつとも及び世を嘗て憶みはかる事をひだり傷寒裏寒熱脉証
一間然とあわそく万世の法則ひす事あくび其方りくは汗一ト
一吐一和一温めとくに其財せみあくあひもと筋正を擇く用ひと
を示す主とくの事すとくに宣すとくの事一後確乎とく換ふ
筋すとて今疾病多あく脚も差ひ傷も事なく不傷がくの唐醫
もあきゑく病を瘧れ愈せ事幾百人ぞ此論より拘泥せむとくそれによ
う従ふむか後以て其土よかな葉不驗あるとすと舶して遠方より見るの
蘭醫後の世より論をかくこよ譯をもと載せ敬て信をば

トツシニギモド支那ノ後モテ其畫難醫而已又遇ひシ其國醫を識ル
且是ノビヒニテヨリ居レヤモアムシテ「アラニカール」ツガ支那ヨ血色
をオロウ脉又約シ修シム法アリト称譽したまをり凡ハ此人も吾寺の
佛多一と私ニ田アソ固哉ウ私也シナキ人トスシムアキシの公平の人
又批論をあくシメナハ必賞歎シト不傷が涉獵セリ漢人の著書中一
言も仲景氏の論を搬斥セムと看ジナシを以テ世間の教モベシをあく
漢人後漢の醫書幾数百卷皆此傷寒論を誣セムシのナシとなシ不傷が
多キモナシ半癖ナシトヘリシヒムツヒムツヒムツヒムツヒムツヒムツ
今日を詰サヌク輒免後日モシ猶シテ申作
和蘭醫話下之卷大尾

和蘭醫言
萬町權之進著述
和蘭醫話 二編 同 三編 嗣出
和蘭簡方
文化二年十一月
皇京書房 異佐右衛門
浪速書房 山口又市
上田吉兵衛藏

同

和蘭醫話

二編

同

三編

嗣出

和蘭醫話

二編

同

三編

嗣出

嘉嚮書房藏

和蘭醫話

二編

同

三編

嗣出

和蘭醫話

二編

同

三編

